

〈研究テーマ〉

中小規模病院に勤務する看護師への研究支援プログラムの開発 —大学と病院との連携—

日本赤十字豊田看護大学看護学部¹⁾ 日本福祉大学 看護学部²⁾ 中京学院大学看護学部³⁾
岐阜大学医学部看護学科⁴⁾ 元日本赤十字豊田看護大学看護学部⁵⁾
東野 督子¹⁾ 石黒 千映子¹⁾ 大野 晶子²⁾ 水谷 聖子²⁾
柿原 加代子³⁾ 杉村 鮎美⁴⁾ 三河内 憲子⁵⁾

Development of research support programs for Nurses to Continue Working in Small and Medium-sized hospital –Collaboration with hospitals and university –

Tokuko Higashino¹⁾, Chieko Ishiguro¹⁾, Akiko Oono²⁾, Seiko Mizutani²⁾
Kayoko Kakihara³⁾, Ayumi Sugimura⁴⁾, Noriko Mikouchi⁵⁾

Japanese Red Cross Toyota College of Nursing Faculty of Nursing¹⁾
Nihon Fukushi University²⁾, Chukyo Gakuin University³⁾
Nursing Course, School of Medicine, Gifu University⁴⁾
Formerly, School of Nursing Japanese Red Cross Toyota College of Nursing⁵⁾

Key Words : 大学と病院の連携、中小規模赤十字病院、研究支援

I. はじめに

日本赤十字豊田看護大学は、中部圏の赤十字の看護師養成を担って設置された中部圏で唯一の赤十字の大学であり、赤十字病院と大学との連携によって、相互に看護の質の向上を目指そうとしているところである。平成21年度より、中部ブロック管内において、赤十字医療施設キャリア開発ラダーの導入の現状と看護職の意識調査及び各病院の教育・研究支援環境の調査を行い、病院と大学との連携体制や必要な支援について検討してきた。具体的な成果を以下に述べる。

平成21年度には、3つのプロジェクトを立ち上げ実施した。プロジェクトAとして、中部ブロック管内大規模病院2施設における全看護職の質問紙調査を行い、中堅看護職のキャリア開発ラダーに対する遂行意欲の低下が明らかになった。また、プロジェクトBとして、中部ブロック管内大規模病院2施設における経験年数別看護師のインタビュー調査を行

った結果、看護職のキャリアアップ志向は職場において形成され、それらの活性化には、看護管理者の病棟管理方法が影響すると示唆された。さらに、プロジェクトCとして、中部ブロック管内の看護部の教育担当者に対して、教育・研究支援状況の質問紙調査及び聞き取り調査と実際の施設環境の調査を行った。

その結果、病院の規模により教育・研究環境に違いがあり、大学から受けたい支援についての病院側のニーズにも違いがあることが明らかになった。そして、大規模病院は、教育・研究環境が比較的整っており、早急に支援を必要としているのは中小規模病院であることが示唆された。

上述の示唆を踏まえて、平成22年度からは、中小規模施設の看護師を対象に、質問紙調査及びインタビュー調査を開始した。その結果、看護職のキャリア開発を促すために必要な支援としては、研究支援であることが明らかになった。

そこで、今回、中部ブロック管内の中小規模赤十

字病院の看護師を対象に、必要とされる研究支援システムを提案と実施することから、研究支援システムの評価を行うことにした。また、大学と看護師との交流により、中部ブロック管内の赤十字病院のネットワークの拡大を図ることと、将来的には、社会的な見地からも大学として貢献することを目的とする。

II. 方法

- 1) 対象：中部ブロック管内の中・小規模（500床未満）の赤十字病院12施設において協力の得られた看護師でラダーレベルⅢ程度を対象とした。
- 2) 期間：平成24年3月～平成26年9月
- 3) 場所：日本赤十字豊田看護大学
- 4) 倫理的配慮・同意書の手続き：日本赤十字豊田看護大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：2314）。
- 5) 研究支援システム概要とその評価
支援システムは、「集合プログラム」と「個人プログラム」によって構成した。集合プログラムは、3段階で、研究に必要な知識の講義、対象者の興味ある研究テーマに関する研究計画、実施、分析、発表に至るまで支援することを目指した。個人プログラムは、集合プログラムと次の集合プログラムまでの間に、対象者別に担当教員がメール・電話・郵送等による個別に研究指導する。そして、対象者は自施設において、看護研究グループを結成して研究を進める。

研究支援システムの評価は、集合プログラム毎の質問紙調査とグループインタビューの分析によって行う。質問紙調査は、①研究に関する理解度、②研究課題への取り組み状況、③集合プログラムに参加の関することを項目として、集合プログラム毎の参加開始前と終了時、さらに研究発表終了時にも収集する。

グループインタビューは、集合プログラム毎に実施する。インタビューの所要時間は45分程度とした。そして、記録媒体（ICレコーダー）に録音し、内容は、研究に対する思い、研究課題への取り組み、集合プログラムに参加したことなどの思いを聴取する。

III. 実施した支援プログラム

- 1) 対象者は、3施設の4名の看護師であった。平均年齢42歳、平均経験年齢19.5年、キャリア開発ラダーレベルはⅡ～Ⅲ、職位はスタッフ3名、係長1名であった。
- 2) 研究支援プログラムの実施内容

研究支援プログラムは実際に研修支援を進める中で「当初のプログラム」を大幅に修正することとなった。図1に、修正後プログラムを示した。修正後プログラムの詳細については以下に記述した。

導入期

【第1回 集合プログラム実施要綱：大学としての研究支援システム】

1. 日 時：第1日目 平成24年3月23日（金）
10：00～17：00
第2日目 平成24年3月24日（土）
9：00～16：30（1泊2日）
2. 場 所：日本赤十字豊田看護大学
6階 ゼミナール室
3. 目 的：臨床における看護研究の基礎を学ぶ。
4. 目 標：1) 看護研究の進め方を理解する。
2) 文献検討の方法を学ぶ。
3) 看護研究に必要なデータ収集・分析など統計方法について理解する。
4) 自己の研究課題について洞察する。
5. 講 師：日本赤十字豊田看護大学
前教授 三河内憲子
日本赤十字豊田看護大学
教授 東野督子
日本福祉大学看護学部
教授 水谷聖子
日本福祉大学看護学部
准教授 大野晶子
中京学院大学看護学部
教授 柿原加代子
静岡県立大学看護学部
教授 西川浩昭
日本赤十字豊田看護大学
図書館司書 中尾明子

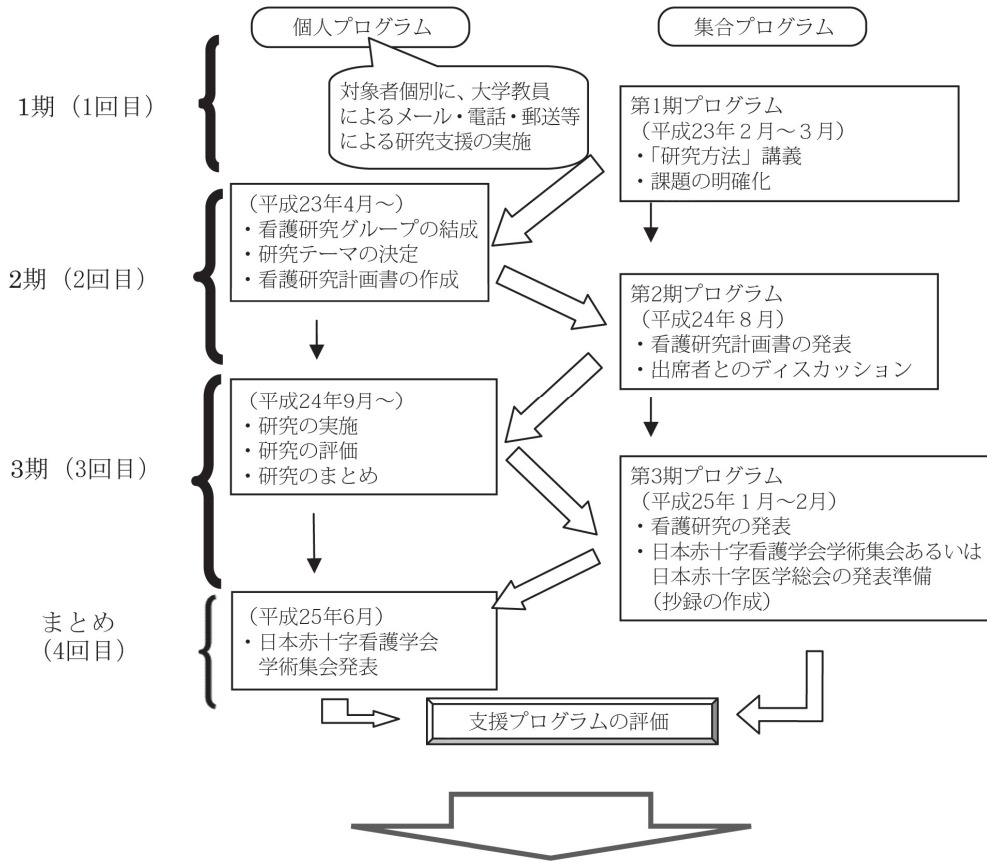
* 講師の職名は現職で示した。

6. 講義内容

講義として、①看護における研究、②看護研究に必要な文献検討、③看護研究に必要な統計手法、④文献検索の方法等を行い、それらに伴う演習として、①文献検索、②質問紙調査票の作成、③文献検討、グループワーク、④文献検討、研究課題の明確化を行った。最後に各自の研究課題を発表し、ディスカッションした。

また、対象とした研究参加者にはプログラム参加前までに、興味のあることを明確にすることを課した。

【当初のプログラム】



【修正後プログラム】

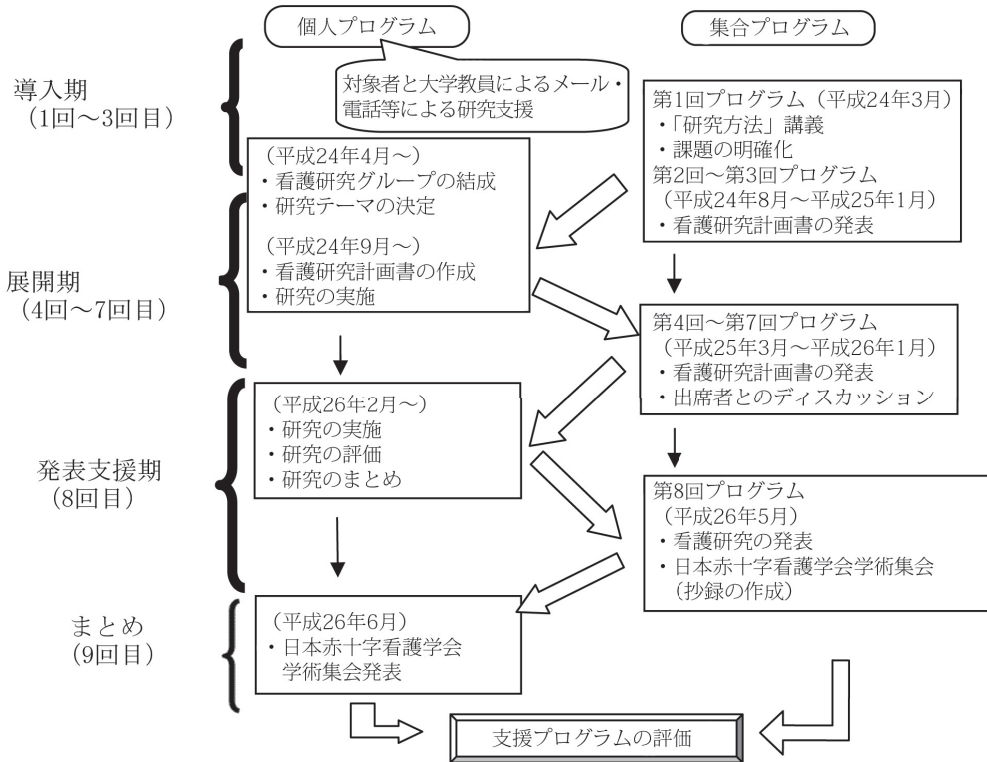


図1 当初のプログラムと修正後プログラム

【第2回 集合プログラム実施要綱】

1. 開催日時：平成24年 8月10日（金）
10時から17時
平成24年 8月11日（土）
9時から16時30分（1泊2日）
2. 開催場所：日本赤十字豊田看護大学
6階 ゼミナール室
3. 内容：研究計画の作成と倫理審査申請書類の作成、質問紙調査項目の作成とインタビュー調査の準備。

【第3回 集合プログラム実施要綱】

1. 開催日時：平成25年 1月25日（金）
13時から17時
平成25年 1月26日（土）
10時から16時30分（1泊2日）
2. 開催場所：日本赤十字豊田看護大学
6階 ゼミナール室
3. 内容：質問紙調査項目の作成とインタビュー調査の準備。
* 1名はデータ入力とデータ分析。

【展開期】

【第4回 集合プログラム実施要綱】

1. 開催日時：平成25年 3月15日（金）
10時から16時半
2. 開催場所：日本赤十字豊田看護大学
6階 ゼミナール室
3. 内容：データ入力とデータ分析。
* 1名は質問紙調査項目の作成とインタビュー調査の準備。

【第5回 集合プログラム実施要綱】

1. 開催日時：平成25年 6月1日（土）

10時から16時半

2. 開催場所：日本赤十字豊田看護大学
6階 ゼミナール室
3. 内容：データ入力とデータ分析。

【第6回 集合プログラム実施要綱】

1. 開催日時：平成25年 8月19日（月）
10時から16時半
2. 開催場所：日本赤十字豊田看護大学
6階 ゼミナール室
3. 内容：データ入力とデータ分析。

【第7回 集合プログラム実施要綱】

1. 開催日時：平成26年 1月7日（火）
10時から16時半
2. 開催場所：日本赤十字豊田看護大学
6階 ゼミナール室
3. 内容：第15回日本赤十字看護学会学術集会演題登録の準備

【発表支援期】

【第8回 集合プログラム実施要綱】

1. 開催日時：平成26年 5月17日（土）
10時から16時半
2. 開催場所：日本赤十字豊田看護大学
6階 ゼミナール室
3. 内容：第15回日本赤十字看護学会学術集会発表資料作成指導

【第9回 集合プログラム実施要綱】

1. 日時：平成26年 6月14日・15日
2. 発表場所：第15回日本赤十字看護学会発表
（日本赤十字豊田看護大学）
3. 対象者4名が発表した演題名と発表方法



図2 集合プログラムの実施状況

- A：夜間受け入れ病棟開設前後の夜間入院に対する看護師のストレス（口演発表）
- B：医療型病床に勤務する看護師および看護保補助職員の転倒・転落症例の要因分析（口演発表）
- C：病院における退院調整・退院支援に関する実態調査（口演発表）

D：在宅療養患者を課程訪問した担当看護師の気持ち（口演発表）

IV. 支援プログラムの分析結果とその評価

導入期、展開期、発表支援期の集合プログラムの介入前と介入後のアンケートから得られた結果を表1、表2に示した。

項目	n=4					
	導入期		展開期		発表支援期	
	第1回～第3回 介入前	第3回 介入後	第4回～第7回 介入前	第7回 介入後	第8回 介入前	第8回 介入後
研究疑問を明確化するまでのプロセスの理解	2	4	4	3	4	4
文献レビューの必要性の理解	4	4	4	3	4	4
研究動機・研究目的を明確にする必要性の理解	4	4	4	3	4	4
倫理的な配慮の必要性の理解	4	4	4	3	4	4
研究デザインを考える必要性の理解	1	4	4	3	4	4
対象・データ収集方法を検討する必要性の理解	2	4	4	3	4	4
研究計画作成のプロセスの理解	2	4	4	3	4	4
適切にデータを管理する必要性の理解	4	4	4	3	4	4
適切にデータを分析する必要性の理解	4	4	4	3	4	4
学会等に発表する意義の理解	2	3	3	3	4	4
発表に必要な資料作成の理解	1	2	2	2	3	4

注) 4段階尺度「大変思う」「そう思う」を「『思う』」、「あまり思わない」「思わない」を「『思わない』」とし、「『思う』」の人数を示した

表1 看護研究の理解度（「思う」と回答した人数）

項目	n=4					
	導入期		展開期		発表支援期	
	第1回～第3回 介入前	第3回 介入後	第4回～第7回 介入前	第7回 介入後	第8回 介入前	第8回 介入後
研究疑問を明確化するまでのプロセスの理解	1	3	3	3	4	3
文献レビュー結果を整理できる	1	3	2	1	3	4
研究動機・研究目的を書くことができる	2	4	3	2	4	4
倫理的な配慮を書くことができる	0	3	2	1	3	4
研究デザインを考えることができる	0	3	2	1	3	3
研究対象・研究期間を決定できる	0	4	2	3	4	4
データ収集方法を検討し決定できる	0	3	1	2	4	2
適切にデータを管理できる	2	4	3	2	4	4
適切にデータを分析できる	0*	4	0	2	3	3
発表に必要な資料作成の理解	0*	2*	1*	1*	3	3

*該当なしあり

注) 4段階尺度「大変思う」「そう思う」を「『思う』」、「あまり思わない」「思わない」を「『思わない』」とし、「『思う』」の人数を示した導入期・展開期については、進捗状況により「該当しない」と回答した者もいる

表2 自身の研究課題への取り組み状況（「思う」と回答した人数）

理解度の調査において、導入期の介入前では、①研究疑問を明確化するまでのプロセス、②研究デザインを考える必要性の理解、③対象・データ収集方法を考える必要性の理解、④研究計画作成のプロセスの理解などは、「思わない」との回答もあったが、介入後には4名とも「思う」と回答していた。しかし、⑤学会等に発表する意義の理解、⑥発表に必要な資料作成の理解については、介入後も理解していないとする回答もみられた。

展開期では、介入前より介入後に理解しているとする回答人数が少なくなった。発表支援期では、介入前後の変化はなく、ほぼ全体の項目で4名が理解していると回答した。

これは、展開期において、参加者自身が看護研究を理解できたと認識するには至っていない現状が示唆されていたが、発表支援期に至っては、研究開始から学会発表の準備を行うプロセスによって、看護研究についての理解を深められたことにつながったと考えられた。

このことは、インタビューでも確認されている。導入期において「時間の余裕がほしい」、「じっくり考える時間がほしい」などの発言を経て、展開期では、研究の進展と行き詰まりを繰り返し、発表支援期に至って初めて「データから分析をこんな風にすることがわかった。」「抄録の作成により研究の流れを知ることができた。」「発表はすることによって自信となった」などの発言が認められた。そして、今回の研究支援システムの評価としては、4名ともそれぞれの研究テーマを学術集会で口演発表した事から、一定の成果が得られたことは事実である。しかし、支援システムは、当初の計画より延長し、2年6か月要した。このことは、個人プログラムにおける主な指導方法にメールが選択されたことや対象者が自由に使用できるパソコン環境がなかったことも

影響したと考えられた。メールの指導は、対象者の記載が主な判断基準となることから、表現されなかった内容は取り上げられない。そのため、誤ってあらぬ方向へ進められた内容を集合プログラムで初めて指摘される場面も見られた。現在は、Web会議など、対面できない状況を補完できるツールの開発もあることから、今後は、さまざまなツールを積極的に試し、研究支援に有効な方法を選定したいと考えている。今回得られたデータの詳細は他稿に譲り、今後も引き続き、中部ブロック赤十字病院と中部ブロック県内の日本赤十字豊田看護大学と連携できる可能性を探りたい。

謝 辞

本研究は、平成24年度日本赤十字看護学会助成金を受けて実施した研究の一部である。調査にご協力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 東野督子, 水谷聖子, 他: 赤十字病院のキャリア開発ラダーにおける継続教育・研究環境に関する調査研究. 日本赤十字豊田看護大学紀要7(1):161-166, 2012.
- 2) 日本看護協会: 継続教育の基準ver.2, 2012, 参照日: 2014年8月6日, 参照先: <http://www.nurse.or.jp/nursing/education/keizoku/>
- 3) 日本赤十字社事業局看護部: 看護実践能力向上のためのキャリア開発ラダー導入の実際. 日本看護協会出版会, 2008.
- 4) 坂下玲子, 北島洋子, 他: 中・大規模病院における看護研究に関する全国調査. 日本看護科学会誌33(1):91-97, 2013.
- 5) 杉村鮎美, 水谷聖子, 他: 赤十字医療施設における中堅看護師のキャリア開発に関する意識. 日本赤十字豊田看護大学紀要9(1):89-94. 2014.